ママ・ギャング

緑川　有

●登場人物

華岡　鈴（すず）（12歳）

華岡ユリ子（鈴の母35歳）

桂木彰（かつらぎあきら）（ユリ子の同級生35歳）

村田芳雄（ユリ子の同級生35歳）

桜田先生（鈴の担任教師38歳・男性）

原　友香（ともか）（鈴のクラスメイト12歳）

女性ニュースキャスター（30代）

ラジオナビゲーター（男性・声のみ40代）

1

華岡家。やや古い一軒家のリビングを想定するが、具体的なインテリアはなくてよい。正面にテーブルと二脚の向かい合った椅子だけのシンプルな舞台。上手片隅に削りかけの木の塊や個性的な抽象の彫刻作品が数点置かれている。（大小の四角いブロックや球体だけの抽象的なものでよい）箱の中に彫刻の道具などある設定。椅子に座っているユリ子がテーブルの上に何やら紙を並べて考え込んでいる。ドアの開閉音がして鈴の声が聞こえる。

鈴　ただいまー。ママー、ただいまー。

鈴、リュックサックを背負って下手奥（玄関の方向）から登場。

ユリ子　おかえり！

ユリ子、鈴に顔を向けてすぐに手元の紙に目を落としている。鈴、リュックサックをおろしながらユリ子のまわりを歩き、何か話すきっかけを探している様子だったが、決心したように口をひらく。

鈴　ママ、機嫌悪い？

ユリ子　すこぶるいい機嫌。

鈴　よかった。

ユリ子　（鈴の方に振り向いて）何よ。どうしたの？

鈴　ちょっと言いにくいんだけど……。

ユリ子　何よ。ママと鈴のあいだに遠慮はいらないぜ。

鈴　うん、担任の桜田先生がね、給食費を忘れないようにって。

ユリ子　あれー、給食費って無償化されたんじゃなかったけ？

鈴　ママ、知ってるくせに。

ユリ子　とっとと無償化しろーってんだよね。

鈴　でね、桜田先生の伝言なんだけど、忘れないように銀行口座から自動引き落としの手続きをとってはどうですか、クラス全員そうしてますがって。それと現金を持って来なくても、振込用紙がありますから、それで振り込んでもらえばいいんですって。

ユリ子　（突然、立ち上がって）何度言ったらわかるの、桜田は。親が銀行に行って振り込んだり、ましてや銀行口座から自動引き落としになんかしたら子どもは、親が苦労して稼いで給食費を払っているという認識がなくなるのよ。それ、すなわち、親に対する感謝も薄くなる。感謝がなくなると親を無視したり、反抗的になったり、不良になるくらいですめばいいけど、家庭内暴力にまで発展してあげくの果てに親子で殺し合いなんてことにもなりかねない。

鈴　ママ、オーバーだな。給食費から殺人事件まで話もってく？　桜田先生は銀行振込の方法もありますよって言っただけなんだけど。

ユリ子　我が家の方針は伝えたはずよ。毎月、袋に入った千円札三枚と百円玉ひとつに十円玉四つを親から受け取って、担任に手渡すことに意味があるって。ここはとっても大事なとこなんだよね。電話でそのこと伝えた時は「なるほど、なかなかユニークな教育方針ですね」なんて納得してたのよ。すべての保護者の皆さんにもご賛同いただきたいくらいだわ。鈴、まさかそんなことで、クラスの誰

かのいじめにあったりしてないよね。

鈴　そんなことでいじめられてないよ。それに、桜田先生はみんなの前で、そんなこと言わないよ。いつもわたしにそっと言ってくれるよ。わたしは桜田先生好きだよ。

ユリ子　そうか、鈴が信頼しているならママも信頼しなくちゃね。それなりに教育者としての自覚は持ってるのね。ごめん、給食費忘れないようにするよ。

鈴　うん、でも、もう少し忘れていても大丈夫だよ。

ユリ子　そう？　じゃあ、もう少し忘れているね。それより大事な話があるんだ。座って。

鈴、ユリ子の向かいに座る。ユリ子、大きく深呼吸。

ユリ子　鈴が生まれたときから、私たち二人は強い信頼関係で結ばれ、今日まで生きて来た。

鈴　ママったら、急にどうしたの？

ユリ子　私たちは最高の相棒だよね。

鈴　うん、もちろんだよ。

ユリ子　鈴、よく聞いてね。とてもだいじなことだから。ママはとうとう決心したわ。

鈴　（ちょっと楽しそうに期待しながら）どんな決心？

ユリ子　給食費のことなんて、もう気にしなくていい人生にする。お金のことで頭がいっぱいの暮らしからおさらばするの。

鈴　どんな決心でそうなるの？

ユリ子　少しばかり勇気がいることだけど、賛成してほしいの。

鈴　（やや不安気味に）勇気がいるってどんな決心したの？

ユリ子　もうこれしか、この貧しさから抜け出す方法が見つからない。こんな苦しい日々にさよならを告げるのよ！　鈴、どこまでもママについて来てくれるよね。

鈴　うん、ついて行くけど、ママ、何を考えているの？

ユリ子　決心したの。世間で言えば正しい選択だと褒められることはないかもしれない、いや、むしろ間違った選択だと非難は覚悟のうえ。おばあちゃんは悲しむかもしれないけど、もう、私たちにはこの道しか残ってないのよ。

鈴　もしかしたら、それって、悲しくて辛い道？

ユリ子　そうね。そうかもしれないけど、覚悟を決めて実行するしか道はないの。

二人、にらみ合うようにお互いを見つめ合っている。

鈴　だめよ、ママ。そんなバカなこと考えちゃダメ。

ユリ子　まだ何にも話してないけど。さすが鈴ね、ママの計画、分かったんだ。

鈴　うん、分かった。でもダメ。もう少し待って。わたしが大人になったらきっとママを助けるから。

ユリ子　待てない。

鈴　お願い、考え直して。わたし、ちゃんと働いて、ママがお金のことで悲しくならないように頑張るから。諦めちゃだめだよ。ママらしくないよ。わたし、嫌よ。死ぬなんて嫌よ。心中なんて考えないで。

ユリ子　何言ってるの。なんで私たちが心中するの？　何で死ななきゃならないのよ。馬鹿言うんじゃないわよ。こんなことで尻尾巻いて死んでたまるもんですか。

鈴　なんだ、そうだよね。ママがそんなこと考えるはずないよね。ああー、びっくりした。じゃあ、何？

ユリ子　（もったいぶった様子で、間をおいてから）私たちはギャングになる！

鈴　（とっさに意味がつかめず戸惑った様子で）ギャングって……何？

ユリ子　（自慢げに）ギャングってね、別の言い方をすると強盗団よ。銀行強盗とか。

鈴　ええー、まさか、ママ、銀行強盗って、あの銀行を襲ってお金を奪う、あの強盗のこと？

ユリ子　そのとおり！

鈴　ママったら、やめて。いくら何でも変だよ。冗談でしょう。

ユリ子　冗談じゃないわ。ママ、本気よ。

鈴　ほ、本気でギャングになるの？

ユリ子　ええ、なるのよ。まさか、女性が、まさか小学生が銀行強盗なんて、奇抜な発想がミソよ。

鈴　小学生って、わたしもギャングになるの？

ユリ子　相棒として当然でしょう。ママ一人で出来るはずないわ。二人で力を合わせるのよ。

鈴　ママ、ちょっと待って、落ち着いて、冷静になって。

ユリ子　ママはいつも冷静よ。

鈴　ママはとっぴなこと考えつく天才だけど、それはちょっと変よ。

ユリ子　これはよーく考えて出した結論よ。

鈴　映画やテレビのドラマだって、銀行強盗の成功なんかないでしょう。一生懸命計画を練って準備を整えてやっても、たいてい何かのトラブルやミスが起きて失敗してるよね。そして犯人は、逮捕されるか射殺されて終わりだよ。

ユリ子　鈴、そんなうまくいかなかったストーリーばかり考えるのはどうかなー。映画やテレビは成功した結末にしたくないからしないだけ。こういうことをしたら罰を受けますよって、どこか上から目線だよね。そんなことに惑わされないで前向きに大成功を想い描くのよ。

鈴　いやいや、だめだってば。それに、もし万が一、成功したとしても悪いことは悪いことだよ。悪いことして幸せになれるはずないよ。ママ、いつも正直に生きなさいって言っているじゃない。

ユリ子　もちろんよ。正直に生きることと、生きるためにギャングになることは関係ないわよ。

鈴　ママ、やめて。そんな恐ろしいこと考えないで。母と子どものギャングなんて、うまくいくはずないよ。

ユリ子　成功しないのは計画が完璧じゃないからよ。こんなことは行き当たりバッタリでやっちゃだめなのよ。時間を掛けて準備するの。ママと鈴が組めば鬼に金棒よ。

鈴　ママ、待って。道を踏み外そうとしてるよ。それに、子どもを犯罪に引き込むのは親としてどうなのかな。大人は子どもの手本にならなくちゃ。

ユリ子　何きれい事言ってるのよ。生き抜くための手段よ。

鈴　だったら、生き抜くための別の方法を考えようよ。ほら、区役所とか相談に行ってみようよ、何か助けてくれるよ。

ユリ子　役所が助けてなんかくれるもんですか。今までだって、ちっとも親身になって相談にのってくれたことないじゃない。生活保護を受けようと思って相談した時のこと、忘れたの？　仕事は彫刻家だけど、売れないから貧しいと言ったら、あのうらなりみたいな担当者、何て言ったと思う？『彫刻は趣味ということにして、まともな仕事を捜してみてはどうですか』、こう言ったんだよ。彫刻家の仕事のどこがまともじゃないのよ～。

ユリ子、テーブルを叩きつける。鈴、思わず立ち上がる。

鈴　ギャングになる、なんて軽く言っているけど、ギャングには武器が必要だよね。武器なしでどうや

ってお金をくださいって言うつもりなの？『わたしたちはギャングです。すみませんが、この鞄にお金をください』なんて、丁寧にお願いして、『どうぞ』って入れてくれるわけないよね。やっぱりこれは、ママのジョークだよね。最後に面白かったねって笑うつもりなんだよね。

ユリ子　鈴、ママの目を見て。冗談言ってるように見える？

二人、見つめ合ったまましばらくの間。

鈴　見えないかも。でも、いったいどうやって強盗するつもりなの？　ドラマなんかだとピストルやナイフで脅したりしてるよ。そんな恐いことするつもりなの？

ユリ子　うーん、ナイフはなんとなく趣味に合わないわね。拳銃でちょっとびっくりさせるだけって方法がいいかなって思っているの。

鈴　拳銃って、どうやって手に入れるの？　そのへんに売ってないよ。

ユリ子　分かってるわよ。ここはアメリカじゃないものね。コンビニやスーパーで売ってやしないわよ。

鈴　どうするつもりなの？

ユリ子　鈴、ママの職業は何だったでしょう。

鈴　彫刻家。

ユリ子　それも超腕のいい彫刻家よ～。脅すだけの拳銃なら、ママが木で彫っちゃうわよ。これ見て、今日、図書館に行ってコピーして来たのよ。

ユリ子、テーブルの上の数種類の拳銃の写真やイラストのコピーを自慢げに掲げる。そして、舞台の隅に積んである木の塊を指差す

ユリ子　あの木片が（今度は手元のピストルの写真を指差して）この拳銃になるのだ！

鈴　ちょっと待って、ママには予備校のデッサン教室のお仕事があるじゃない。今までだって貧しいけど何とかやってこれたでしょ。

ユリ子　うーん、実はね、状況が変わったの。また、予備校のママのクラスの受講生が減ったのね。大学の合格率が低いと生徒がよその教室に取られてしまうんだよね。落ちるのは、こっちの指導のせいじゃないよ。自分の能力を正当に判断して、諦めることも必要なんだよね。二年も三年も浪人して、まだ自分の能力に気がつかないなんて、なんて鈍感なんだろうね。

鈴　でも、ママは日頃、何事も簡単にあきらめちゃダメだ。続けることに意味がある、継続こそ才能だって言ってるよ。

ユリ子　ああー、そうだったね。受講生のデッサン力を伸ばすのがママの仕事だもんね。でもなぜだか伸びない、そして美大には合格出来ない。そして、ママはクビになった。

鈴　クビ？　クビになったの？

ユリ子　そう、受講生がこんなに減ってしまったので、このクラスは閉めることにしました、だってさ。

鈴　そうだったの。でも、区のカルチャーのほら、木工教室の仕事、決まったんでしょう。あれが始まればわたしたちリッチになるって、そう言ってたじゃない。もう生徒募集のチラシなんかも印刷出来ていて、あとはオープンを待つだけだって。

ユリ子　そう、私たちはリッチになるはずだった。鈴の給食費も忘れないですむはずだった。運命は過酷だね。容赦ないよ。こっちも受講生が集まらなくてキャンセルになったの。まったく、あの担当者、本気で生徒を集めようって努力が足りないんだよね。他人事なんだよ。

鈴　そんな……。約束してくれたんじゃなかったの？　木彫やりたいっておばさんたちがたくさんいる

から生徒はいっぱい来ますよって言ってくれたんじゃなかったの？　手鏡彫ったり、ブローチ作ったり、いろいろ計画があるって。ずっと延び延びになっていたけど、やっと動きだしたって。

ユリ子　あの担当者、すみませーん、こんなご時世なんで、またの機会によろしくお願いしまーす、なんて軽く言っちゃってさ。どんなご時世だったらＯＫだって言うんだよ。こっちは生活かかってるのに、まったく想像力が貧困なんだよね。

鈴　ああー、でも、この前、面接に行ったドラッグストアは？

ユリ子　（ポケットから取り出した封書を手渡して）これ読んでごらん。

鈴　（封書を開いて読み始める）これ何と読むんだろう。「……　ますますごセイ何とかのこととお慶び申し上げます。この度は、当店へご応募いただきありがとうございます。さて、お返事が遅くなりましたが、誠に残念ながら今回は採用にいたりませんでしたのでお知らせいたします。華岡様の今後のご活躍をお祈りいたしております」

ユリ子　今後の活躍なんて祈っていただかなくてけっこう！

鈴　だめだったんだ……。

ユリ子　荷物の上げ下ろしなんかもお任せください、日頃トンカチ持って木削ってますから体力には自信ありますって、そうとううまくアピールしたつもりなんだけどね。シングルマザーで大変なんですなんて、悲しげな表情で同情もうまく買ったはずなんだけなー。それにしても、アンラッキーはまとめて襲ってくるもんだね。

鈴　そうか……。でも、急にギャングにならなくても……。（気を取り直して）もう少しだから、もう少し待ってて。来年はわたし、中学生になるから、そしたらどこかでアルバイトをさがすよ。だから、そんな恐ろしい計画はやめて。

ユリ子　中学生でアルバイトはどうかな。鈴は幼い感じがするから高校生って誤魔化すのも無理だもの。も

う決めたの。ママに任せて。（拳を掲げて）やってやるわー。

鈴　（うろうろとあちこち歩き回りながら）ああー、どうしよう。もっと速く時間が過ぎてくれるといいのになー。早く高校生くらいになるといいのになー。そしたら、お金の事で悲しんでいるママを助けられるのに。こんなとき、ヨシさんがいたらいいのになー。ヨシさんがいたらきっとママを止めてくれるのに。

ユリ子　鈴、ヨシはもう私たちとは関係ないんだよ。いつまでもヨシを頼るわけにはいかないよ。

鈴　うん、分かってる。ヨシさんはもう来ないよね。

（ここから鈴の回想シーン）

舞台中央ではユリ子が資料をながめて思案している。照明落ちて舞台手前に、ヨシが段ボールを抱えて登場。鈴、舞台前に移動してヨシとの対話。

ヨシ　よーっ、一人か？　ママは？

ヨシ、段ボールをドンと置く。

鈴　デッサン教室でお仕事。（段ボールを開けて）うわーっ、ラーメンにお菓子、すごーい、ヨシさん、ありがとう。

ヨシ　気にするなって。ここは相変わらず食糧難世帯だからな。二人ともちゃんと飯食ってるのか。鈴ちゃん、今朝何食った？

鈴　クリームパン。

ヨシ　何個食った？

鈴　一個。牛乳も飲んだ。

ヨシ　育ち盛りがそんなんでどうすんだい。

鈴　大丈夫だよ。わたしは学校に行けば給食があるから。給食費忘れてもちゃんと給食出るんだよ。それより、ママの方が心配だな。

ヨシ　そうだな、ノミと金槌持ったら、まわりが何も見えなくなって、飯食うのも忘れてるからな。子どもが親の心配してんだから世話ないや。（芝居じみた言い方で）苦労だね～。

鈴　お金がなくて大変だけど、ママとつき合うのはちっとも苦労じゃないよ。それに（舞台の隅の彫刻を指差して）こんな素敵なもの創るママなんて、学校中探してもいないよ。

ヨシ　そうだな、彫刻家としては一流だよ。おいらが保証する。

鈴　一流なのにどうして売れっ子にならないの？　有名にならないの？

ヨシ　それ言われるときついな。うまく説明出来ないな。そんなもんだよ世の中ってさ。

鈴　世の中の人にはママが一流に見えないってこと？

ヨシ　誰にでも分かるもんじゃないんだ。おいらは分かってるけどな。

鈴　どうして分かったの？

ヨシ　鈴ちゃんが赤ん坊の頃は、背中に鈴ちゃん括り付けてそこで木削ってたな。訪ねて来て声かけても、まるで聞こえてないんだよね。あの姿は鬼気迫ってたな。要は姿だよ、姿。あれは一流の彫刻家の姿だよ。売れるとか、有名になるとか、そんなこと考えて作品創ってるヤツは一流とは言えねえな。

鈴　ママはそんなこと考えてないの？

ヨシ　ああー、考えてない、昔っからただの一度もな。必死で粘土こねたり木削ってるだけだ。本物の芸術家ってのはそんなもんだ。そうやって産み出したものが本物の芸術作品と言うんだ。

鈴　本物の芸術作品って、見た人はどうして分かるの？　ちゃんと説明してあるの？

ヨシ　説明なんかしちゃいないさ。本物の作品を見た者はな、その場から動けなくなるんだ。ぼぉーっと見つめて釘付けだ。

鈴　そうなの？　ママは何があっても三年に一度の個展だけは死んでもやるって頑張ってるけど、あんまり売れてないみたい。画廊の借り賃と運搬費で消えるって。本物だったら、もっとたくさん売れてもいいよね。

ヨシ　そこだよな。本物が売れるには長い時間がかかるもんなんだよ。真面目に生きてりゃあそのうちラッキーなこともあるさ。

鈴　わたし、いいこと思いついたんだけど。

ヨシ　ほう、何だい？

鈴　ヨシさん、ママと結婚すればいいのに。

ヨシ　おっとう、突然、直球で来たな。

鈴　ママには旦那さんがいない、ヨシさんは奥さんと子どもがいない、わたしはお父さんがいない。二人が結婚するとちょうどいいと思うの。

ヨシ　結婚なんてーのはな、子どもが考えるほど簡単じゃないんだよ。ちょうどいいだけじゃ、ダメなんだよ。男と女というのはな、そう簡単なもんじゃないんだよ。

鈴　ふーん、そうなんだ。

ヨシ　鈴ちゃんも大人になったら分かるさ。

鈴　ヨシさん、わたしのパパのこと知ってる？　会ったことある？

ヨシ　ママからは何も聞いてないのか？

鈴　うん、バカみたいな話でずっと誤摩化してたよ。

ヨシ　例の、パパは宇宙人てやつか？

鈴　わたしのパパは宇宙人で、わたしは人間と宇宙人の最初の子どもらしい。さすがに今はもうそんなこと言わないけど。

ヨシ　あははは、ママが宇宙人みたいなもんだけどな。鈴ちゃんのパパかー。（考え込んでしばらくの間）まあー、いつか会えるさ。会えば分かるんじゃないか、親子ってどこか似てるからな。

（鈴の回想終り）

ヨシ退場。（穏やかな音楽とともに照明元に戻る）
ユリ子、テーブルのピストルの資料をじっくりと眺めている。鈴もつられて拳銃のコピーをじっと見る

ユリ子　さーて、どの拳銃がいいかなー。鈴はどれが好み？

鈴　どれがって、聞かれても。これを木で彫っちゃうの？

ユリ子　そうだよ。このアメリカのコルト・ガバメントや、このベルギーのブローニングは使いやすそうだし、けっこう一般的みたいなんだけど、デザインが味気ないよね。金属的でつまんない。なんというか、華がない、ロマンがない、哲学がない。やっぱり、ベルギーのこのナガンMか、アメリカのちょっと古い時代のスミス&ウェッソンマグナム28なんてかっこいいよね。ママはこっちの方が好みかな。こっちの方が作ってて楽しいよ。どう思う？

鈴　どう思うって、これって、大きくて重そうで恐そうだね。

ユリ子　だって、鈴、ギャングで使うんだよ、ちっちゃくて可愛い拳銃だったら意味ないでしょう。（図面

を指差しながら）この銃口の鉄の部分とグリップの木の部分の質感の違いをうまく表現しなくちゃね。レバーの部分なんかも細かい作業が必要だね。腕の見せどころだわ。ああー、ぞくぞくしてきた。

鈴　いつだったか、テレビのニュースで言ってたよ。立体が作れるコピー機でピストル作って警察に捕まってた人がいるって。

ユリ子　だめだめ、そんな安っぽい拳銃、芸術性の欠片もないわ。ママはね、あんなもので勝負しないわよ。どんなときでも美の追求は絶対よ。長年培ってきた創造力と技術で、堂々と最高の拳銃を彫り上げてみせるわよ。

鈴　そういうことじゃなくて、拳銃って、作るだけでも犯罪になるって、その時のテレビニュースが言ってたよ。

ユリ子　鈴ったら。わたしたちは拳銃を作るのが目的じゃなくて、もっと大きな犯罪にこれから挑戦しようとしてるのよ。拳銃は持つのも作るのも犯罪だって百も承知よ。そこのところは目をつぶらなきゃ。

鈴、うなだれたまま、戦闘ムードの（ただし、あくまでも明るい感じの）音楽の中、（暗転）

2

（朝）鈴とユリ子、パンと牛乳だけの朝ご飯を向かい合って食べている。

ユリ子　鈴、（上手を指差して）見てくれた？　ピストルの原形が出来上がってきたよ。わくわくするよね。

鈴、ちらりと上手方向に目を向けるが、黙ってパンを齧る。ユリ子、鈴の消極的な反応を無視して、楽しそうに話を続ける。

ユリ子　銀行も大きいところはダメだね。振込め詐欺防止とかで、やたら警備員がうろうろしてるんだよね。そこでね、ほら、神社に向かう参道の手前に郵便局があるでしょ。手始めに郵便局なんてどうかしらと思って昨日（きのう）偵察してきたんだ。地味な郵便局で、人の出入りも少なそうなんだよね。もちろん、きのうは偵察だけだよ。計画はじっくり練らなくてはいけないから。

鈴　偵察ってどんなふうに？

ユリ子、立ち上がって、帽子にサングラス、マスクを着ける。

ユリ子　顔を隠した方がいいと思ってね、ほら、この格好で行って来たの。どうだい？

鈴　その格好、ちょっと変だよ。

ユリ子　そう？　ビジュアルにこだわり過ぎたかな。

鈴　手紙を出すか切手を買うためにやってきた普通の人を演じなくちゃ。それじゃ目立ち過ぎるよ。

ユリ子　目立ち過ぎたかな？

鈴　さりげなくが大切だよ。マスクはＯＫだけどサングラスは外して帽子だけにした方が、その方が自然だよ。

ユリ子　そうか。サングラスはわざとらしいね。鈴、貴重な意見ありがとう。鈴のその力強い仲間意識、勇気が出るよ。

鈴　（独り言で）ああー、わたし、何言ってんだろう。止めなくちゃならないのに……。

ユリ子　今度、鈴も学校休んで一緒に偵察に行こうよ。

鈴　学校休むの？　ギャングの偵察のために学校休んでいいの？　桜田先生に何て言うの？　まさか、ギャングのためなんて言えるわけないし。

ユリ子　バカね。ママが、鈴は風邪気味ですとか、お腹こわしましたとか、何だって理由をつくって電話するよ。まかせて。

鈴　ズル休みはしたくないな〜。親がずる休みの手助けするって、どうかな？

ユリ子　しかたないわよ、必要なことだもん。

鈴　でも、皆勤賞がかかってるし。土曜日か日曜日じゃだめなの？

ユリ子　郵便局ってね、営業は平日だけ。土、日とかも開けておいてほしいよね。しかも営業時間は午前九時から午後五時までなの。民営化してもう長いのにサービス業という精神に欠けているんじゃないの。

鈴　わたしの学校生活はどうなるの？。

ユリ子　（鈴の不安を無視して、楽しそうに）でね、散策しながら逃走のルートを確認したんだ。あのあたりには細い路地がたくさんあるから、猫みたいにうまく抜けられそうだよ。そして、すごい発見をしたんだよ。路地を抜けていくと、電車の線路の上に橋が掛かっていて、なんと、踏切を渡らなくても向こう側に行ける道があったんだね。あの道は逃走ルートに使えるかもしれないよ。

鈴　ママ、そのあたりに住んでる人はたぶん、みんなその橋のこと知っていて、なかなか開かない踏切を避けて、橋を利用してると思うよ。そんなにすごい発見じゃないと思う。

ユリ子　なんだ、びっくりしてくれると思ったのに。

鈴　人間は猫じゃないから、誰にも見られないで、簡単に逃げたりできないと思う。

ユリ子　誰にも見られないでって言うより、見られても怪しまれなければ大成功！　でしょ？

鈴　大成功かなー……。（呟くように）人生の大失敗に突き進んでいるように思えるけど。

ユリ子　（聞こえない振りで）何か言った？　あの郵便局、ほんと客が少ないね。あんな状況で経営が成り立っているのかしら。まあー、そこは私たちには関係ない話だけど。郵便局の向かいにコインランドリーがあったでしょ。覚えてる？

鈴　うん、何度か行ったことあるね。あんまり利用している人いなかったな。置いてあるマンガ本もすごーく古いものばっかりだった。

ユリ子　そう、ずいぶんさびれたランドリーだったでしょ、そこが狙い目なのよ。すごくいいアイディアを思いついたんだ。まず、あの郵便局にママがさりげなく入って行く。そして、ママがギャングになってお金を奪って、すぐさま郵便局を出る。その間、鈴はあのコインランドリーで待っていて、郵便局から出てきたママと鉢合わせするんだ。もちろん、その時は他人を装うんだよ。一瞬で鈴の洗濯物の袋の中にお金をバサッと移して、ママはあの路地に入り込んで追って来た局員をうまく撒いて逃走する。追っ手は鈴のことを、洗濯をしていた健気な小学生がいるなーと思うだけで、まさかギャングの一味とは気が付かないわ。その隙に、鈴は知らーん顔して堂々と反対方向に逃げる。グッドアイディアでしょ。

鈴　そうかなー、そんなにうまくいくかなー。

ユリ子　ただね、ちょっと気になることがあるのよね。郵便局で手紙を出すわけでも切手も買うわけでもな

く、うろうろしてたら、女子局員が『何か、ご用はありますでしょうか?』ってわざわざ近づいて来て、じっとママの顔を見たのよね。マスクしててもサングラスしてても安心出来ないよね。なんていうか人間の匂いというか雰囲気みたいなものって隠せないからね。

鈴　うん、たぶん。サングラスにマスクでも、もうママは覚えられたと思うよ。

ユリ子　やっぱりね～。動物的勘の鋭そうな女子だったし。本当に暇な郵便局だったな。客が少ないってことは、うまくいく要素だと思ったけど、妙に警戒されるかもしれないね。

鈴　そうだよ。入った途端に警戒されて、警察に通報されて終りだよ。ギャングなんてうまくいくはずないよ。諦めたほうがいいよ。

ユリ子　鈴の言うとおり、ママはもう要注意人物になってるかもしれないね。郵便局は諦めたほうがいいかもね。でも、ギャングの道は諦めないわよ。手始めにコンビニって手もあるけど、コンビニ強盗って、思いつきで押し入っちゃってる感がチマチマしててかっこ悪いよね。コンビニはパスね。まあ、今回は単なる偵察だから。上を目指していろいろ学習していけば、道は拓けるよ。

鈴　（ユリ子の言葉を遮るように立ち上がり）わたし、もう行かなくちゃ、遅刻しそう。

ユリ子　ごめん、ごめん。いってらっしゃい。しっかり勉強するのよ。

鈴、リュックサックを担いで出かける。ユリ子、手を振って送る。ユリ子も退場。（暗転）

3

小学校の教室。正面に教壇の机が見える。出来れば正面に黒板をイメージするものがあるとベター（手前に生徒の机が並んでいるはずだが、実際はなくてよい）窓からの日差しで舞台全体が明るい。簡単な窓枠もある。

鈴がぽつんと一人で考え込んでいるところに、友香が縄跳びの縄を持って現れる。

友香　鈴ちゃん、二重飛び連続の練習しょうよ。昼休みは出来るだけ校庭に出て遊びましょう、というのが学校の方針だよ。

鈴　友香ちゃん、高学年は出来るだけ、グラウンドを低学年に譲りましょうって方針もあるよね。

友香　鈴ちゃん、おかしいよ。どうしたの？　先生みたいなこと言って。もうすぐ体育祭だから、みんな練習しているよ。

鈴　ごめん、今日はちょっと疲れてて身体が重いのよね。

友香　いやだ、鈴ちゃん、うちのママみたい。急におばさんになってるよ。

鈴　うん、自分でもなんだかすごく歳をとったみたいな気がするの。おばさんも通り越してお婆さんになったみたい。

香　鈴ちゃん、大丈夫？　さっきの国語の時間、先生に当てられたのに窓の外ばかり見てたでしょ。鈴ちゃんらしくないよ。何かあったの？　元気ないみたいだけど。

鈴　うん、ちょっと、考え事してたから。

友香　わたしたち親友だよ。悩み事があったら相談してね。

鈴　（少しの間のあと決心したように）友香ちゃん、わたし、不幸になるかもしれない。友香ちゃんが考えられないような恐ろしい不幸。

友香　恐ろしい不幸って何？　ホラーみたい。何があったの？

鈴　ママが……。

友香　鈴ちゃんのママ、どうかしたの？　まさか、ゾンビになったとか？　悪霊に変身してしまった！

なんて、そんなゲームの世界みたいなこと起るわけないよね。

鈴　悪霊に変身じゃないけど、悪に変身かも。ママね、もうほとんど暴走状態なの。

友香　やだー、鈴ちゃんたら、鈴ちゃんのママってさ、昔から暴走してない？

鈴　そうかな？

友香　うん、授業参観の時だって、ほら、図画工作の時間だったじゃない、花瓶に生けた花の写生の授業で、突然、誰かれなく指導始めてさ、もっと自由に描いていいんだ！　なんて。美術の熊谷先生が引いちゃって。でも、クラスのみんなにはウケてたけどね。

鈴　そんなこともあったね。その程度ならそんなに罪は重くないけどね。

友香　そんなに深刻なの？　何があったの？

鈴　実は、ママが今作っている作品なんだけど、のめり込んでいて困ってるの。

友香　それが暴走状態なの？　何作ってるの？　と聞いても鈴ちゃんのママの作品、何だかよく分からないものね。ああー、でも、おもしろいと思うよ。うちのママが言うには、よく分からないのが芸術なんだって。

鈴　そうなんだ。でも、今度の作品は、見ただけですぐに分かるものなの。分からなきゃ意味ないし。

友香　と言うことは、芸術はやめたの？

鈴　うーん、そのへんのところはどうなんだろう。本人はそれも芸術だと思ってるかもしれない。

友香　ふーん、それが恐ろしい不幸の元になるようなものなの？

鈴　たぶん、そうなると思う。ママのこと、どうすればいいのか分からない。

友香　鈴ちゃん、親ってさ、時々暴走するけど、温かく見守ってあげなくちゃ。親子なんだから、信じてあげなくちゃ。

鈴　そうだよね。わたしとママ、二人だけの親子だし、信じてあって生きて行くしかないよね。

友香　そうよ。うちのママも時々、意味不明な行動とかあるけど、しかたないよ。見守ってあげなくちゃ。家族ってそんなもんだよ。

鈴　友香ちゃん、わたしたち親友だよね。もし、わたしが暴走して、とんでもないところに行ってしまっても、ずっと親友でいてくれる？

友香　何があってもわたしたち親友だよって言いたいけど、暴走の程度にもよるかなー。

鈴　（がっくりした様子で）だよね。

友香　もう、やだなー、鈴ちゃん、そんなに落ち込まないで。うそよ。わたしたち何があっても親友だってば。暴走しても親友、大人になっても親友だよ。ねえ、そんなことより、早くしないと休み時間なくなっちゃうよ。

鈴　あとでいくから、友香ちゃんいつものところで練習してて。

友香　わかった。じゃあ、先に行ってるね。

友香、勢いよく駆け出していく。

鈴、教室の窓から校庭をながめている様子。そこに桜田が登場して、鈴の後ろから声をかける。

桜田　華岡鈴。

鈴　（驚いて振り向いて）あっ、先生。

桜田　華岡、どうした？　具合でも悪いのか？　お前、今日の給食残しただろう。あんなに大食いのお前がどうしたんだ？　腹でも痛いのか？

鈴　別にどこも痛くないです。ちょっと食欲が無くて。

桜田　そこがおかしいって言うだよ。なんで食欲がないんだ？　お前、もしかして給食費のこと気にしているんじゃないだろうな。そんなことは気にするな。遠慮しないでしっかり食え。そういうことは親が心配することだ。子供は一によく食べ、二によく遊び、三によく学ぶ、この三つをやっておけばいいんだ。

鈴　先生、先生って口かたい方ですか？　秘密とか守れます？

桜田　おいおい、誰に言ってんだ？　先生ほど口のかたい男はこの学校中、いや日本中の小学校探したっていないぞ。どうした、言ってみろ。

鈴　先生、ママが暴走してます。

桜田　華岡のママはいつも暴走してそうだが、こんどはどんな暴走だ？

鈴　ギャングになるかもしれません。

桜田　ギャングって何のことだっけ？　おまえたちは勝手に言葉を作ってしまうからな。

鈴　普通のギャングです。銀行強盗とかのギャングです。

桜田　おいおい、給食費のために、あのギャングになるってか？

鈴　いろんな事情で。

桜田　確かに暴走だな。ママに言っておけ、発想はユニークだけど、リスクが高過ぎるってな。

鈴　高過ぎるリスクって、何ですか？

桜田　苦労した割りに成果が見込めないぞ。つまり、失敗するに決まってるさ。映画の世界でもギャングは大抵失敗してるしな。仲間割れなんかして、不幸な結末がほとんどだな。

鈴　仲間割れですか？

桜田　まさかギャングを一人で計画はしないだろう？　まさか、仲間が娘なんてこともないよな。

鈴　先生、ギャングはママの冗談です。

桜田　分かっているよ。先生も冗談だ。

鈴　うちのママ、冗談が多過ぎて。ユニーク過ぎて時々困ります。

桜田　ユニークなママでラッキーって思えばいいだ。なかなか経験できないぞー。とにかく、子供はうんと食え、食って大きくなれ。

鈴　はい。

桜田、満足げに「一によく食べ、二によく遊び、三によく学ぶ」と呟きながら去って行く。

（暗転）

4

（夜）華岡家。ユリ子は作業スペースで拳銃作りに没頭している。木材はリアルな拳銃の形を見せ始めている。ユリ子、方向を変えてながめては、満足げにうなずいている。センターのテーブルでは、鈴がノートや教科書を開いて宿題をしている。時々、ユリ子を見ては、ため息をついている。

ユリ子　さっきから大きなため息、もう五回目だよ。良くないよ～。何か悩み事でもおありですか？　おじ

ょうさん。

鈴　悩み事ばかりの人生です。

ユリ子　そりゃ困った。何か楽しいこと考えるといいよ。

鈴　ママは、木を削っている時って、ほんとうに楽しそうだね。作品作りも拳銃作りも同じなんだ。

ユリ子　そりゃあそうよ。気合い入れて彫ってるからね。ママの傑作を楽しみにしててよ。

玄関のチャイムが鳴る。ユリ子は作業に没頭して気が付かない様子。

鈴　ママ、誰か来たみたいだよ。

ユリ子　そう？　こんな時間に誰かな？　いいよ、無視して。

玄関のチャイム、再び鳴る。

ユリ子　ママ手が離せない。鈴、出てみて。ただし知らない人だったらドア開けちゃだめだよ。

鈴　うん、分かった。

鈴、下手玄関の方向に向かう。やがて、声だけが聞こえる。

鈴　どなたですか？

桂木　こんばんは。カツラギという者です。

鈴　カツラギさんて、知りません。すみません、帰ってください。

桂木　あのー、華岡ユリ子さんのお宅ですよね。ユリ子さん、いらっしゃいますか？　友人のカツラギアキラというものです。

鈴　待ってください。

鈴、戻って来る。

鈴　ママの名前を知っている男の人だよ。お友だちのカツラギアキラさんだって。

ユリ子、トンカチを持ったまましばらく考え込んでいる。

ユリ子　いませんって言って。（玄関に戻ろうとする鈴を引き止めるように）あっ、待って。やっぱりママが出るわ。

ユリ子、作り掛けの拳銃に丁寧に布を被せて箱の中に仕舞ってから、玄関に向かう。やはり、声だけが聞こえる。鈴、玄関の様子を気にして佇んでいる。

桂木　いやー、久しぶりだな。十二、三年ぶりかな。まだここに住んでたんだ。俺のこと、覚えてくれてる？

ユリ子　覚えてない。知らない人。

桂木　何言ってんだよ。相変わらずだな。ユリ子、元気そうじゃないか。いやー、まさか、まだここに居るとは思わなかったよ。何となく足が向いて来てみたんだよ。そしたら、表札が華岡ってそのままだからさ。この家の持ち主の叔母さん、まだ外国暮らしなんだ。ラッキーじゃないか。

ユリ子　まあね。この家追い出されたら、私たち明日からホームレスだわ。

桂木　私たちって、さっきの子、誰？

ユリ子　私の娘。

桂木　何だ、結婚したのか。

ユリ子　娘がいるからって、結婚しているとはかぎらないでしょ。

桂木　ああー、そう？　シングルマザーってやつか。

ユリ子　まあね。で、何か用？

桂木　何だよ、冷たいな。懐かしいと言ってくれよ。

ユリ子　全然、懐かしくない。

桂木　上がっていいか？

ユリ子　どうしようかなー。

桂木　おじゃましまーす。

ユリ子の後ろから、大きなリュックを担いだ髪も伸び放題、無精髭の桂木、登場。その風貌に鈴、ちょっと引く。

桂木　（鈴を見て）やあー、こんばんは。クマみたいだけど人間だから安心してね。

鈴　こんばんは。

桂木、リュックを床に降ろすと、作業場に置かれているユリ子の作品をじっとながめたり、手で触れたりしている。

桂木　ユリ子、どれもいいじゃないか。進化してるなー。

ユリ子　そう？　ありがとう。（鈴に向かって）あっ、このおじさんは、ママの同級生。

桂木　ママとは大学生の頃からずっとお友達だったんだよ。カツラギです。君、名前は？

鈴　すずです。漢字は鈴虫の鈴です。

桂木　鈴虫の鈴か、いい名前だね。今、何年生？

鈴　小六です。

桂木　へえー、ユリ子、いくつで子供生んだの？

桂木、背を向けてお茶を入れているユリ子に声を掛ける。

ユリ子　（背を向けたまま）いくつだったかなー。

桂木、床に転がっている丸太をテーブルに運んできて、椅子代わりにして座る。

鈴　ママは大学卒業の時、大きなお腹だったんです。

桂木　そうなの？　おじさんが退学したのは四年生の夏休み前だったからな。知らなかったよ。ユリ子、いろいろあったみたいだな。

ユリ子　まあね、十年も経てばいろんなものが変化してるよ。そっちはどうしてたの？

桂木　ほとんど放浪の旅ってとこかな。

ユリ子　放浪の旅で何してんの？

桂木　あちこち歩きながらスケッチ旅行って感じ。

ユリ子　仕事は？　収入はどうしてるの？　まさか今でも親頼ってるってことないよね。

桂木　建設現場とかで肉体労働のアルバトして、少し金が貯まったら旅に出るってとこかな。それにヒッチハイクや野宿なんかもしながらだから、たいして費用はかからないからさ。

ユリ子　へえー、お気楽でけっこうですね。

桂木　いやー、お恥ずかしい。そうだ、鈴ちゃん、いいものがあるぞ。

桂木、リュックの中をごそごそ探って、紙袋を取り出して、テーブルにのせる。

桂木　四国の山ん中で作ってる干しぶどうだよ。食べてごらん、うまいぞ。山ぶどうだよ。東京じゃあ手に入らないぞ。鈴、恐る恐る一粒つまんで口に入れる。

鈴　（顔をしかめて）すっぱーい。

桂木　（笑いながら）このハードさがいいだろう？　大地の味だよ。

ユリ子、お茶を運んでテーブルに着く。

ユリ子　なんで、四国なの？

桂木　最初の頃は中国の敦煌あたりまでいったんだけどさ、最近は日本中いろんなとこ旅して、四国が一番長かったかな。八十八ヶ所巡りもやったぞ。瀬戸内の海はよかったなー。海というより、大きな河みたいに水がさらさら流れているんだ。高知の太平洋側から瀬戸内に入ると、途端にころっと風

の色が変わるんだよ。

鈴　風に色があるんですか。

桂木　あるさ、風には色も形もあるさ。色は風景の色そのまま。吹いて来た風は一瞬にして風景の色を吸収して、風に色が付くんだけど、見ている人間の目には風景しか見えていない、見えていないと錯覚してるんだけどね。形はね、風に吹かれて木々が揺れるだろう、そうすると梢の形がいろいろ変化するだろう、それが風の形なんだよ。

鈴　ふーん。

ユリ子　相変わらず強引な感性だこと。

ユリ子、干しぶどうを皿に移す。アットホームな温かさを感じさせる音楽が流れる。三人で音楽に合わせるように手を動かして、時々干しぶどうを口に運ぶ。その度にすっぱそうに顔をしかめてお茶を飲む。

桂木　懐かしいな、このお茶。

鈴　おじさん、うちのお茶、知ってるんですか？

桂木　ああー、この家の裏庭に群生するドクダミ茶だろう。あいかわらずまずいなー。

鈴　うちはずっとこのお茶なんです。時々、ママは庭の笹の葉で笹茶も作るけど、ドクダミ茶の方が美味しいです。

桂木　でもなー。俺が言うのもなんだけど、子どもにドクダミ茶ってのはどうかなー。子どもの成長にはよくないような気もするけどなー。

鈴　大丈夫です、わたしちゃんと成長してますから。身長だってクラスで三番目に背が高いんです。

桂木　そうなんだ。（ユリ子に向かって）ユリ子、ちゃんと母親やってんだな。ちょっと見直したよ。木は削れるけど料理なんて出来ないと思ってたよ。失礼！

ユリ子　料理はほとんどしないよ。出来ないし。

桂木　そうなの？　鈴ちゃんのご飯なんかはどうしてんの？　まさか、毎日コンビニ弁当？

ユリ子　何よ、あなたに関係ないでしょう。ひとんちのご飯の心配してくれなくてもけっこうです。

鈴　ええ、大丈夫です。夕食はいつも決まっていて、コロッケと餃子とヤキトリが順番にあるんです。ママが買って来てくれます。今日はヤキトリの日でした。

桂木　ええー？　いつも決まってるの？　今日はヤキトリって、昨日は？

鈴　餃子です。

桂木　一昨日は？

鈴　コロッケです。

桂木　その前は？

鈴　ヤキトリです。

桂木　その前は？

鈴　餃子です。

桂木　ローテーション？

鈴　はい。

桂木　ちなみに聞いていい？　何個？

鈴　コロッケは一個、餃子は五個、ヤキトリは二本です。

桂木　それっていつから？

鈴　ずっとです。

桂木　（二人を見比べながら呆れ気味に）ずっと……。

鈴　小さい頃からずっとです。でも、岡山のおばあちゃんちに行ったら、おばあちゃんがいろいろご馳走作ってくれたこともありました。

桂木　それ以外は、ず〜〜とコロッケと餃子とヤキトリを繰り返していたわけ？　まさか……。

ユリ子　いつもの肉屋が店閉めちゃったことがあって、あの時はヤキトリと餃子でしのいだよね。

鈴　今は駅前のスーパーで全部買えちゃうからママは楽なんです。

桂木　それってどうかな？　笑えないよ。俺が言うことじゃないけどさ、もう少し子どもの栄養とか考えたほうがいいと思うよ。

ユリ子　あなたの意見は求めていない。

桂木　（鈴に向かって）おじさん、こう見えても料理得意なんだよ。自炊しながらあちこち放浪してたからさ。

鈴　そうなんですか？　ハンバーグとかカレーライスなんかも出来るんですか？

桂木　ハンバーグ、カレーライス、まかせて！　おじさんの得意中の得意。鈴ちゃんはどんなカレーが好きかな？　おじさんのカレーは骨付きチキンカレー。ハンバーグにはポテトフライと目玉焼きも付けようか？

鈴　す、すごーい！　ああー、食べてみたいな〜。おうちでハンバーグとかカレーライスとか。

桂木　ハンバーグもカレーライスも家庭料理の定番だぞ。

鈴　骨付きチキンは、スプーンでもほろりと肉がほどけるほど煮込まれているのね。

桂木　もちろん。こんな大きなチキンがごろりと。

鈴　（ジェスチャーを交えて）ご飯とカレーをこうスプーンで、さくさくっと混ぜ合わせて口に運ぶと、最初はスパイシーな香りと一緒に果物や蜂蜜の複雑な甘さが広がって、しばらくしてカレーの辛さ

が……ああー、刺激的！　ああー、からーい！　お水、お水！

桂木　（ジェスチャーで）はい、お嬢さん、お水。

ユリ子　二人でなに遊んでるのよ。

鈴　それから、それから、焼きたてのハンバーグの横にはフライドポテトがどさっと添えられていて、上には目玉焼きものっていて、ホークを突き刺すと、卵の黄身がどろりと広がってハンバーグのソースと絡み合ったりして、それを口運ぶと口の中で肉汁があふれて……。（ほとんど興奮状態に）たまらんなー。なんて幸せなの！

桂木　鈴ちゃん、エア食レポ、うまいな～。今度、おじさんが、材料持参でエアじゃない本物のカレーライスもハンバーグも作ってあげるよ。

鈴　本当ですか？

ユリ子　ちょっと待った！　勝手にうちで料理するのやめてくれる。

桂木　失敬。君たちの暮らしに口を挟むのはどうかとは思うけど、でも、やっぱり子どもの栄養とか考えた方がいいよ。

鈴　（二人の間を取り持つように）大丈夫です。わたし、ちゃんとこのとおり育ってます。

桂木　そうか、鈴ちゃんは逞しいな。

ユリ子　あなたに言ってもしかたないけど、シングルマザーって、経済的にもけっこう大変なんだよ。うちにはうちの事情ってものや流儀があるの。他人のあなたにあれこれ言ってほしくないわ。

桂木　ああー、そうだよね。ごめん。

鈴　ママは一生懸命お仕事してくれてます。ずっとピンチの連続だったけど、ママはすごいんです。いろんな仕事をやってきたんです。お弁当屋さんやコンビニ、一番長く続いたのは予備校のデッサン教室。今はちょっといろいろ事情があって、大変なんですけど、でも頑張っているところです。

桂木　ふーん、そうか。彫刻家が暮らして行くにはこの日本は厳しいよな。

ユリ子　貧困に立ち向かうために、今ね、（鈴の方をみて意味ありげに）アイディアを練ってるところだもんね～。

鈴　（複雑な表情で）うん、まあー、アイディアかな？

桂木　おいおい、そのアイディアって、銀行強盗でもやるっていう、とんでもない計画だったりして。

鈴　ひぇーっ。

鈴、驚いて思わず立ち上がる。ユリ子は落ち着いた様子。

桂木　（笑いながら）鈴ちゃん驚かせてしまったね。ごめんごめん。今のはおじさんのジョーク。ママは若い頃から突拍子もないこと言い出す癖があったからさ。つい。

鈴　もし、ママがそんなこと言い出したら、おじさんどうします？　止めてくれます？

桂木　どうかなー、君のママは思い込んだらひと筋だからな。

鈴　昔の友だちが道を踏み外そうとしてるのに、止めないんですか？

桂木　すみません、その時は止めます。（ユリ子に向かって）鈴ちゃん、しっかりしてるね。ところで、みんなどうしてる？　ハラやヨシは元気か？

ユリ子　ハラは、三年ほど前に嫁に行ったよ。絵はまったく描かなくなったけど、幸せだって。ヨシはアルバイトしながら劇団で役者やってたけど、頑張っていたんだけど二年前にお父さんが倒れてね、それで実家に帰って旅館継いでるんだ。

桂木　そうか、ヨシのやつ、やっぱり稼業継いだんだ。抵抗してたけどな。あいつは真面目で性格も良いし、旅館のおやじに向いてるよ。

ユリ子　旅館のおやじに向いてるって言い方、ちょっとカンにさわる。ヨシはやりたいこと諦めたんだよ。

桂木　まあー、同情の余地はあるけど、自分で選んだ道だからさ。俺には真似出来ないけどさ。

ユリ子　好きなように生きられる人って、ラッキーなんだよ。あなたはその放浪の人生とやらを自分で選んで、そのことを自慢してるの？　自分だけは特別だって思ってるわけ？

桂木　自慢なんてしてないよ。自分の気持ちに正直にやってるだけだよ。

ユリ子　昔とちっとも変わらないね。桂木君は自分だけが可愛くて自分の感情だけが大事なのよ。

桂木　ええーっ、それユリ子に言われるかな？　ユリ子だってほとんど自分のことしか見えてないというか、自分の世界の中でしか生きてないって感じだぜ。ねえ、鈴ちゃん。

鈴　どうかな……。ユニークではあるみたいです。

桂木　そう、それ。ユニーク。（気を取り直したように）ユニークと言えば、あの頃は面白かったな。よく四人でつるんでバカばっかりやってたな。

ユリ子　いまだにバカやってる人もいるみたいですけど。

桂木　またまたー。（鈴に向かって）ママは皮肉屋だね。

鈴、干しぶどうをつまむ桂木の指をじっと見ている。

鈴　おじさんの爪、わたしと同じみたいですね。

桂木、鈴、手を並べて見比べている。ユリ子も身を乗り出して見ている。

桂木　ええー？　本当だな。

鈴　丸くってぺったんこで、この爪の形好きじゃないです。変な形だもん。
桂木　そんなことないさ、こういう爪の人は手先が器用なんだぞ。自慢していいんだぞ。
鈴　ママも同じこと言ってました。
ユリ子　そうよ。手先が器用ってことは基礎の基礎なんだよ。手先が器用な人は算数だって得意なんだよ。
鈴　そうかな。わたし算数も理科も得意じゃないけどなー。
桂木　ママはちょっと強引だね。鈴ちゃん、学校では何の勉強が好きなの？
鈴　図画工作です。
桂木　図画工作、得意なんだね。
鈴　はい、一番得意です。
桂木　ほらね、手先が器用なんだよ。そいつはいいな。おじさんも図画工作だけは得意だったんだ。鈴ちゃん、大きくなったら何になりたい？　ママみたいに彫刻家になるか。
鈴　わたしは大人になったら、会社みたいなところで働いて、毎月同じ日にお給料をもらうような仕事だったら何でもいいです。
桂木　そうか、それが正しい選択かもしれないな。
ユリ子　鈴、小学生がそんなこと考えなくてもいいのよ。ゆっくりやりたいこと見つければいいんだから。
桂木　そうさ。そのうち何か、ものすごく好きなことが見つかるよ。その時は、好きなことやればいいさ。人間、好きなことやってるのが、一番ハッピーだもんな。
ユリ子　それって自分の言い訳みたい。
桂木　言い訳じゃなくて俺の哲学。
ユリ子　ところで、何か用だったの？
桂木　用ってほどじゃ、久しぶりに東京に戻って来てさ、懐かしくなってどうしてるかなーって。突然で

悪かったけど会いたくてさ。電話掛けるのも何だかさ。で、ブラブラ来てみたのよ。家の前のハナミズキも、表札もそのまんまで、時が昔に戻ったみたいだったよ。

ユリ子　昔に戻ったみたいって言われても、何だかね。

桂木　そうだな、俺はあんまり成長してないけど、君は母親もやってるんだもんな。それに、（床や棚にある作品を見渡しながら）ほんとうにいい作品だよ。ユリ子らしい力のある、ユリ子にしか創れない、見ているだけで何かこうキューッと胸のあたりをわし掴みされたみたいな。

鈴　おじさん、ママの芸術が分かるんですね。

桂木　もちろんさ、まあー、一番のファンと言っていいな。

ユリ子　ありがとう。では、もうそろそろ帰ったら。

桂木　ええーっ、追い出すの？　普通さ、俺がそろそろ帰ろうかなって言って、まだいいじゃないの、ゆっくりしてって、ユリ子が言う、これが大人の会話だろう。

ユリ子　私に大人の会話、期待する？

桂木　すみません、期待しません。とにかく元気なユリ子に会えてよかったよ。じゃあー、そろそろ帰ろうかな。

ユリ子　あら、お帰り？　さようなら。

桂木　（立ち上がってリュックを担ぎながら）鈴ちゃん、さようなら。鈴ちゃんにも会えてよかったよ。

鈴　干しぶどうありがとうございました。すごくすっぱくて美味しかったです。

桂木　気に入ってくれてよかった。鈴ちゃん、図画工作頑張って。その爪、自慢していいんだよ。じゃあ、二人とも元気でな。

帰りかけた桂木、立ち止ったまま動かない。しばらく三人とも固まったまま。桂木、振り

向いた途端、大声を上げる。

桂木　ええーっ〜〜！　うそ〜。

ユリ子　な、何よ。何なのよ。

桂木　ええー、まさか！

鈴　どうしたんですか？

桂木、じっと鈴を見つめたまま動かない。

桂木　（興奮状態でユリ子に）そうなの？　そうなんだね。

ユリ子　何がそうなのよ。

桂木　この子、俺の子？

ユリ子　まさか！　なに一人で勝手な想像して興奮してるの。バカみたい。

桂木　（少し落ち着いて）だよな。でも、もしかして可能性ない？

ユリ子　ない！　ゼロパーセント。

桂木　だけど、ほら、爪が同じ形だよ。

ユリ子　バカなこと言わないで。爪の形が似てるからっていちいち親子になってどうすのよ。そこらじゅう親子だらけになっちゃうわよ

桂木　（指折り数えながら）だけど……。卒業のとき大きなお腹だったということは……。

ユリ子　違うって！

鈴、立ち上がって桂木に宣言する。

鈴　わたしのお父さんはヨシさんです。

桂木、ユリ子、鈴を見つめて固まったまま。

桂木　（我に返ったように）なんだ、そうだったのか。ヨシのねえ。早く言ってくれればいいのに。どうしてヨシと一緒にならなかったんだよ。

ユリ子　あなたには関係ないことです。

桂木　まあー、人にはいろんな事情があるからな。そのあたりの複雑な事情は聞かないよ。だけど、ヨシのヤツ、ちゃんと養育費なんか払ってんのか？

ユリ子　養育費ねえ……。

桂木　あいつ払ってないのか？　よし、俺が話しつけてやるよ。あいつの金沢の実家の住所も電話もわかってるから、まかせとけ。

ユリ子　あのね、私たちの関係に勝手に入ってこないで。そういうのをおせっかいっって言うのよ。人間の機微の分からないヤツだな。

桂木　そうか、俺があれこれ言うことじゃないわな。

桂木、納得したようにうなずいている。桂木、リュックからスケッチブックを取り出して、ユリ子に手渡す。

桂木　これ、土産。帰り際に土産もおかしいけどな。また、すぐ旅に出るつもりなんだ。

桂木、ちょっと寂しげに玄関に向かう。何度も振り向いて鈴を見ている。ユリ子、桂木を送って戻ってくる。テーブルに鈴と向き合って桂木が置いて行ったスケッチブックを広げる。

ユリ子　変わらないな、このタッチ。

鈴　あの人、絵描きさんなの？

ユリ子　自称、絵描きね。ママと同じで売れない絵描きだね。これ、四国の森かな。

鈴　素敵な絵だね。ほんとうに風が見えてきそう。

ユリ子、鈴、スケッチブックをめくってながめている。

ユリ子　鈴のお父さんはヨシだったのか。

鈴　わたし、ずっとヨシさんがお父さんになったらいいなーって思ってた。

ユリ子　そうか、ヨシは鈴が選んだお父さんだったのか。

ユリ子、おかしそうに笑って、鈴も応えるように笑う。（暗転）

5

リビングでユリ子が拳銃作りに没頭している。チャイムが鳴る。

ユリ子　はーい、はい、どなた～。

ユリ子、玄関に向かう。玄関から二人の会話が聞こえる。

ユリ子　なによ、放浪の旅に出たんじゃないの？　やだー、どうしたの？　その変身、何事？

桂木　それが何というかちょっと忘れ物したみたいな感じで。鈴ちゃんは学校？

ユリ子に続いて桂木登場。長く伸びていた髪がすっきりと短く苅られ、髭も剃っている。

ユリ子　なんにも忘れてないよ。

桂木　ああー、つまり物理的な忘れ物ではなくて、心の、そう気持ちの忘れ物かな。

ユリ子　はあー？　何それ？

ユリ子、慌てて作りかけの拳銃を道具箱に隠す。

桂木　おらば、ゴッホになる～！（芝居じみた感じで叫ぶ）

ユリ子　それが忘れ物？　相変わらず変だね。はいはい、ゴッホにでもゴーギャンにでも勝手になってちょうだい。

桂木　聞いてくれよ。
ユリ子　はいはい、聞こえてますよ。
桂木　ちょっと提案というか、俺の決意というか、いやー、照れるなー。
ユリ子　（気のない様子で）あたし、忙しいんだよね。やることあるし。その心の忘れ物とやらを持ってとっとと帰ってくれないかな。
桂木　冷たいなー。ほら、ゴッホってさ、付き合っていた女性が妊娠して悩んでいた時に、3人で暮らそうって提案するじゃないか。女性からあなたの子どもじゃないから、なんて言われても、いいんだよ、そんなこと、誰の子どもなんて関係ないよ、子どもは子どもじゃないか、そう言ったんだよ。
ユリ子　そんなこと知らない。見て来たみたいに言うんだね。まるで妄想作家だわ。何が言いたいのよ。
桂木　ヨシに電話した。ヨシのやつ、鈴ちゃんがそう言ったんならそうさ、だってさ。
ユリ子　おせっかいだね。
桂木　鈴ちゃんがヨシの子どもでも、もしかしたら俺の子どもでも、そうじゃなかったとしても、そんなことはどうでもいいじゃないかと。
ユリ子　それで？
桂木　ほら、駅前に中華屋があるだろう。店の前通ったら、アルバイト募集してたんだよ。それでもって、その横におあつらえ向きに千円理髪店があってさ、10分でこのとおりさっぱり。その足で面接したらその場で採用決定。時給千五十円、家からも歩いて通えるしさ。
ユリ子　小岩井から徒歩でここまで？
桂木　いや、この家から通う予定。
ユリ子　何言ってんの。気持ち悪い、ストーカー、それともパラサイト？
桂木　俺の言いたいこと分かるだろう。はっきり言います。俺とユリ子と鈴ちゃんで、ここで暮らすこと

を提案します。

ユリ子　何言ってんの？　それってわたしにプロポーズしてんの？　あはは、笑える～。

桂木　あの頃、俺たちけっこういい加減だったよな。家庭なんて、まるで宇宙の果ての出来事みたいに無視してさ、それがかっこいいって思ってたもんな。正直言うと先のこと考えるのが恐かったんだ。逃げた、ユリ子からも親からも。

ユリ子　それで今頃になって家族ごっこしたいわけ？

桂木　そりゃあ、君も突然十年以上も前の気持ちに戻るのは、照れるかもしれないけどさ。あの頃に戻ってやり直そうよ。

ユリ子　照れないよ。戻る気ないし。

桂木　あの夏、思い出すなー。俺たち運命的に結ばれた二人だったんだね。

ユリ子　いやいや、ただの間違いだから。

桂木　間違いだったのかよ。

ユリ子　そう！　だから昔に戻るというパターンはなし。

桂木　だったらさ、最初はお友だちから、ではなく、最初は鈴ちゃんの父から、ということで、よろしくお願いします！

桂木、ユリの前で直立して頭を下げる。

ユリ子　ごめんなさい。縁がなかったということで。

桂木　いや、縁は作るものだからさ。育ち盛りの子どもが、コロッケと餃子とヤキトリのローテーションで何年もなんて普通じゃあないよ。あり得ないよ。よく死ななかったよな。

ユリ子　（桂木の言い方を真似て）『普通じゃあないよ』あなたの口から普通の話が出てくるとはね。普通って何？　何をもって普通というか、さあー、納得のいく普通の定義言ってみてよ。

桂木　つまり、食生活に関して言わせてもらえれば、今日の晩ご飯何にしょうか？　とあれこれメニューを考える。そういうの普通って言わないか？　このところ魚が続いたから肉にしようか、育ち盛りの子どもには野菜が必要だわ、そろそろ新キャベツの季節、キャベツたっぷりのメンチカツなんかどうかしら？　とか。

ユリ子　ふーん、キャベツたっぷりのメンチカツが好きなんだ。（皮肉たっぷりに）

桂木　うん、まあーね。

ユリ子　それは余裕のある家庭の話。うちはとてもそんな余裕ないの。それにわたしは彫刻の仕事もしなくちゃならないし、ならないというか、したいし。普通の主婦みたいな仕事に時間使えないの。わたし、家事苦手だし。

桂木　ああー、今、普通の主婦って言った。普通って何？　定義言ってみて。どこかで普通をバカにしてるな。

ユリ子　バカにするわけないでしょう。普通以下なのよ、我が家の経済は。ほっといてよ、私たち親子にあなたの普通は必要ないの。

桂木　普通のレベルまでバージョンアップしなくてもさ、やっぱりコロッケと餃子とヤキトリのローテーションは良くないよ。

ユリ子　コロッケと餃子とヤキトリのどこが問題なのよ！　コロッケと餃子とヤキトリに失礼よ。

桂木　もちろん、コロッケと餃子とヤキトリに罪はないよ。ただね、もう少し栄養のバランスなんかも考えてさ、野菜はもっと必要じゃないか？　あと、まあー、何と言うか親としての勤めというか、親として俺に出来ることを考えようと。

ユリ子　なに寝ぼけたこと言ってんのよ。鈴はあなたの子どもじゃないって言ったでしょう。

桂木　だからゴッホになるって言っただろう。誰の子どもなんて関係ないよ。俺、父になるよ。爪の形だって同じだしさ。

ユリ子　爪の形ぐらいで簡単に父になるなんてバカじゃないの。自分で産んだって、あんなに痛い思いして産んだって、そうそう簡単に母になんてなれないのよ。分かってんの？　昼も夜も絶え間なくミルクを与えておしめを取り替えて、虫みたいな赤ん坊の世話するのよ。泣いてる意味も分からないし。ほんとうに白亜紀に二人だけ取り残されたみたいだったんだから。泣きたいのはわたしの方だったわよ。逃げ出したかった。放ったらかして逃げたかった。でも、泣き止んで眠ってる鈴の顔見たら、赤ん坊なのに笑ってるんだよね。夢見て笑ってるの。逃げたいなんて一瞬でも思ったことが申し訳なくて。でも、すぐにそんな幸せを忘れてしまった。毎日そんなことの繰り返しだった。一人で母親になるって、ほんと大変なんだから！

桂木　そ、そうだよね。（頭を下げながら）よく、一人で頑張って来られました。

ユリ子　赤ん坊の存在忘れて、いや、本当は忘れてなんかいなかったと思うけど。放ったらかして死なせてしまったシングルマザーが逮捕された事件があったけど、あれ私だったかもしれない。ほんのちょっとずれてたら私だったのよ！　あの世間を騒がせたのはわたしだったのよ。子連れで再婚したものの、相手の男がとんでもないＤＶ野郎で子どもが虐待されたり、あげくの果てに殺されたり・・・。いや、殺られる前にこちらが先に殺るしかない…か。（どんどん興奮状態になる）

ユリ子の興奮状態に桂木、うろたえている。

桂木　あつ、あのう、すみません、そのあたりで十分です。君はすばらしい母親だよ。成長した鈴ちゃん

を見ればわかるよ。素直な良い子に育ってる。そして、なにより彫刻も捨ててない。（上手作品の置かれている場所に移動して手に取ってみたりしながら）どれもいい作品だよ。これなんか俺、好きだな。ユリ子の作品にはどこかユーモアがあるんだよね。おおらかでいて知的だ。そんなところは昔と変わらないけど、作品は変化して成長してる。

ユリ子　今度は褒め殺し？

ユリ子、ちょっと気をよくして落ち着く。桂木はこの中をのぞいている。

ユリ子　ああー、そこはダメ！

桂木、箱の中の拳銃を見つけて取り出す。

桂木　なんだこれ！　おもちゃの拳銃作ってどうするつもりだよ。

ユリ子　どうもしないわよ。お遊びよ。気分転換。

桂木　何の気分転換だよ。

ユリ子　不条理な世の中に対する恨みよ。

桂木　よせよ。自分の思い通りにいかないからって、歪んだ恨み持ってもろくなことないぞ。まさか、これでコンビニ強盗でもやらかそうってんじゃないよね。

ユリ子　コンビニ強盗なんてケチなこと考えてないわよ。ほら、女二人暮らしじゃない？　いろいろ物騒な世の中だしね、護身用にもなるかなって。いい出来でしょ。

桂木　護身用ってなんだよ。そんなに不安なら、やっぱり俺ここに来るのがいいんじゃないか？　用心棒

みたいな感じで俺のこと、ここにおいてくれればいいじゃないか。そんなおもちゃの拳銃より頼りになると思うよ。空いた部屋あるだろう。なんならこのリビングの隅っこでもいいよ。俺、寝袋一つあればどこでも眠られるんだ。

ユリ子　なんだかんだ理由をつけて私たちの家にパラサイトしようたって、そうはいかないからね。家族ごっこしたいならよそを探してよ。

桂木　家族ごっこしようよ。家族ごっこから始めたっていいじゃないか。たしか皇帝ペンギンだったかな、ペンギンなんてさ、自分の卵間違えたり、パートナー間違えたりしながら、子育てするみたいだよ。気にしないんだよ、ペンギンは。誰が父とか母とか。（皇帝ペンギンが卵を足で蹴ってパートナーに渡すシーンを再現しながら）こんなふうに、ほい、受け取って。

桂木、一人でペンギンのマネをして歩き回っている。

ユリ子　はーい、ここは南極じゃあありません。うっかり間違えて『パパ』なんて誰も言いません。

桂木　ペンギンはおおらかでいいよなー。人間もさ、そろそろ血族とかＤＮＡとか忘れてもいい頃だと思うよ。私の子供だけが大事、私の家族だけが、私の国だけが、私の種族だけが、私の宗教だけが。それ取っ払うと世界平和に繋がると思うんだよなー。

ユリ子　なんだか矛盾してない？　だったら強引に父親になりたがらなくていいじゃない。

桂木　思想には多少の矛盾や綻びは付きものさ。

ユリ子　あなたの思想とやらを聞いてる暇ないから。そろそろ鈴が戻って来るから帰って！

ユリ子、ペンギン歩きのまま桂木を押し返す。

桂木　（急に真面目にユリ子に向き合って手を取る）ほんとうに悪かったよ。君の気持ちなんか何も考えないで、学校がつまらなくなって旅に出てしまった。

ユリ子　どこまでも自分が主人公になりたいタイプだわね。

桂木　言ってくれれば違う行動したかもしれない。

ユリ子　違う行動って？

桂木　父親として責任をとる行動さ。本当のこと言ってくれよ。

ユリ子　責任とるとかとらないとか、つまんないこと言うんだな。他の女のことは知らないけど、そういう考え方嫌いなんだよ。それに、どうしても鈴の父親になりたいみたいだけど、自己満足のためにわたしたち利用するのやめてよね。

桂木　ねえ、考えてみてよ。鈴ちゃんが、将来はお給料をもらえる仕事なら何でもいい、なんて言ってたけど、十二歳の女の子いう台詞じゃないよね。俺さ、真面目に働くよ。もちろん、絵も描くよ。ユリ子は彫刻を、俺は絵を描きながら二人で働く。二人で子育てするんだよ。拳銃彫ってストレス発散なんて、よくないよ。バカみたいだよ。

ユリ子　バカみたいなのはそっちよ。十年前には戻れないのよ。わたしと鈴の暮らしの中には、十年かけて作った私と鈴の関係の中には、あなたの居る場所はないの。さあーさ、ペンギン君、帰ってください。

桂木　ちゃんとした居場所じゃなくても小さな隙間くらい作ってくれよ。

ユリ子　ないない、隙間もない。

ユリ子、強引に桂木を追い返す。

桂木　ちょ、ちょっと待って……。

桂木、ユリ子に押されて玄関に消える。ドアの締まる音。戻って来たユリ子、ペンギン歩きのまま部屋の中をぐるぐる回っている。

ユリ子　ふん、何がペンギンよ！

（暗転）

6

（夜）ユリ子の拳銃作りがほぼ完成している様子。鈴、いつものテーブルで宿題をしている。ユリ子、作業場所から鈴のところに銃を構えて得意げに近づく。

ユリ子　そこのお嬢さん、手を挙げて。

鈴　ママ、ふざけないで。リアル過ぎて恐いわ。

ユリ子　そうお？　そんなにリアル？（銃を構えたりながめたりしながら）うーん、確かに我ながらすばらしい出来だわ。（グリップのところを指して）ここ見て。このSとYは鈴とユリ子のイニシャルだよ。名付けてS&Yマグナム。どう？　ほら、鈴、持ってみてよ。

鈴、恐る恐る銃を手に取る。

ユリ子　鈴、そんな軽そうに持っちゃだめよ。材料は木だから軽いけど、本物は一キロ以上はあるんだから。そこは演技力を発揮してくれなくちゃ。鉄で出来た銃のイメージで持つのよ。テレビのドラマなんかでさ、大きな米俵を羽根布団でも運んでるみたいに軽そうに持ち上げてる演技力のない役者がいるけどさ、ダメだよそんなんじゃ。

鈴、恐そうに銃を持ったまま固まっている。

鈴　ママ、やっぱりママは天才だよ。本物みたいで恐いよ。

ユリ子　ママもね、そう思う。でも、やっぱり、拳銃は子供には似合わないね。これを持つのはママの役目だから、まかせておいて。

ユリ子、鈴から銃を取り上げる。

ユリ子　鈴、ちょっとリハーサルしょうか。

鈴　リハーサルって？

ユリ子　（ニヤリと笑って）もちろん、ギャング本番に向けてだよ。鈴、ちょっと立って。まず、鈴が銀行の窓口にいる行員のお姉さんの役。そこに座って何か作業やってて。ほら、この前、一緒に下見に行ったあの信用金庫を思い出して。絶対、あの信用金庫がいいと思うんだ。寂しげな商店街の、し

かも、通りからちょっと奥に入っていたじゃない。人通りもほとんどなかったし、行員も少なくて、客なんて一人も入って来ない時間がかなりあったから、その時間帯が狙い目だね。グッチョイスでしょう？

鈴　どうかな、あの銀行は向いてないと思うけど。

ユリ子　そう？　まあー、とりあえずリハーサルだから。どんな展開になっても完璧に対応出来なきゃね。

ユリ子、舞台の端に寄ってから、サングラスを掛けマスクを付けてエコバックを肩に掛け銃を構えて鈴に向かう。

ユリ子　静かに！　手を止めて。私たちはギャングよ。あなたに恨みはないし傷つけたくないから、騒がないでこの袋に出来るだけたくさんのお金を入れて。

鈴　きゃーッ！　店長、ギャングです。

ユリ子　騒がないでって言ったでしょう。これが見えないの？　マグナムよ。

鈴　そんな物騒なものは仕舞ってください。ここには防犯カメラもあるし、もう、警察に通報のボタンも押しました。すぐに警察が来て二人ともつかまります。やめましょう。今、諦めたら、これは冗談だったと笑って済ませられるかもしれません。

ユリ子　いやだ、鈴ったら、妙にリアルね。女子行員を人質に取って脅して奪うしかないわね。

鈴　ママ、あの優しそうなお姉さんにそんなこと出来ないよ。あのお姉さんは銃が本物だと勘違いして、ものすごく恐い思いをするはずだよ。恐くてパニックになって、泣き出すかもしれないよ。そんなひどいこと出来ないよ。

ユリ子　大丈夫よ、鈴、これがどんなにすばらしい出来だとしても、しょせん偽物だから。弾なんて出ない

んだから。さあー、ここにお金を入れて！

鈴、いやいや、袋にお金を入れる仕草をする。ユリ子が向きを変えて帰ろうとすると、鈴が警官の役目に扮して舞台の端に回る。

鈴　二人とも銃を捨てて手を挙げて出て来なさい。ここは警官が取り囲んでいる。もう逃げられない！子どもを巻き込んでの銀行強盗はやめなさい。

ユリ子　ちょっと警官来るの早すぎない？

鈴　拳銃を捨てなさい。捨てなければこちらから撃つ。こちらは、オリンピック金メダル並みの優秀な警官が銃を構えている。

ユリ子　警察が簡単に発泡していいの？　第一、こっちは木で出来た偽物の銃なんだから。

鈴　（急に鈴に戻って）ママ、無理だよ。警察には本物にしか見えないよ。

ユリ子、銃を抱えて警官に立ち向かう振り。鈴、ユリ子を庇うように立ち塞ぐと、ユリ子から銃を奪って構える。

鈴　わたしたちを撃たないで！　これは本物のマグナムなんかじゃないのよ。ママは本物のギャングじゃないの。

ユリ子　そんなに簡単に手のうちバラしちゃったらまずくない？

鈴　たぶん、警官にはわたしの声なんか聞こえないわ。この拳銃を本物だと思ってるからパニック状態よ。

鈴、仁王立ちになって拳銃を掲げて撃つ姿勢になる。

ユリ子　鈴、そんなことしちゃ危ないよ。相手がこの拳銃を本物だと思ってるなら、どんな行動に出るか分かったもんじゃないよ。人間、恐怖心に支配されるとろくなことないからね。

鈴、「バーン」と自分で声をあげ、撃たれた振りで倒れる。

鈴　ママ、わたし撃たれてしまった。

ユリ子　ひどい！　子どもを撃つって日本の警察のすることじゃないわ。アメリカだって小学生に銃口向けないって。

鈴　ママ、警官はわたしのこと小学生だと知らないのよ。わたしたちは二人組のギャングなんだよ。わたしはもうダメ。ママ逃げて。

ユリ子　鈴、しっかりして。死んじゃダメ。

鈴　ママ、わたしもう死ぬと思う。もう少し生きて、もう少し大人になって、働いてママを助けてあげたかった。「今日は朝から、お金のことばかり考えていた」ママが、そんなこと言わなくてすむようにさせてあげたかった。

鈴、ばったり倒れる。ユリ子、鈴から銃を奪って構える。ユリ子に向かって銃弾が降って来る様子。（銃の音をいれてもよい）ユリ子もバッタリ倒れる。

（ここから鈴の妄想）女性キャスター、桜田、友香、舞台端に登場。

女性キャスター　またもや悲惨な事件です。今日午後一時十五分頃、世田谷区松林商店街において、松林信用金庫に二人組のギャングが現れました。どこで手に入れたのか、マグナムを手にして「おカネをいただきたいのですが」と、意外に丁寧に要求したようです。人質の女子行員に銃を向け、警察の呼びかけにも応じる様子がなく、警官に銃を向けたため二人組はその場で撃たれて死亡しました。警察の調べでは、強盗は母娘の二人組で、子どもは小学六年生でした。どうしてこのような事件がおきたのでしょうか。警察の詳しい捜査が待たれます。女子生徒の担任と親友という生徒に話を聞きました。

桜田先生　わたしのクラスの生徒だったと聞き、ショックです。少し変わっていたというか、個性的な保護者ではありましたが、まさか、こんなことになるとは。武器は本物そっくりの木で出来た偽物だったと聞きました。生徒の母親は、さすがに腕のいい彫刻家だったんですね。二人の暴走を止められなかったことが、無念でなりません。彼女のＳＯＳをもっと真剣に受け止めていればこんな悲劇は避けられたはずです。（叫ぶように）華岡ー、すまない。あの日のギャングの話をもっと真剣に聞くべきだった。冗談にしてしまった先生がバカだった。

友香　鈴ちゃん、何があっても、わたしは鈴ちゃんの親友だよ。鈴ちゃんともう会えないなんて寂しいよ。鈴ちゃんの言っていたママの暴走ってこういうことだったのね。もっと話を聞いてあげればよかった。相談にのってあげればよかった。鈴ちゃん、ごめんね。力になれなかった。親友なのにちゃんと親友できなかった。

（鈴の妄想終り）倒れていた鈴とユリ子起き上がる。

鈴　桜田先生、ごめんなさい。友香ちゃん、ありがとう。友香ちゃんとは、もっといっぱい遊びたかったな。大人になっても、ずっと親友でいたかった。

ユリ子　鈴、ダメよ、こんな悲惨な展開にしちゃ。

鈴　だって、きっとこうなるよ。拳銃が偽物ってみんな知らないんだから、撃たれて死んでしまうに決まっている。テレビなんかじゃ、悪者はみんな撃たれて死ぬんだ。

ユリ子　（つくづく拳銃をながめながら）そうだな、確かにいい出来だね。本物そっくりだものね。拳銃だけじゃなくてさ、ライフルなんかも彫ってみたくなったよ。

鈴、がっくり肩を落とすが、気を取り直したように顔を上げる。

鈴　ママ、それがいいよ。拳銃一つじゃ迫力ないもの。ライフルも作ろうよ。

ユリ子　（鈴の変化に驚きながらも）そうだね。やっぱり機関銃なんかあると、ギャングのはくがつくよね。作ってみようか。

鈴　そうよ。いっぱい武器を作ろう。いっぱい作って、仲間も集めて、車も用意して、一度にたくさんのお金を奪うんだ。

ユリ子　鈴、何か変だな。いつもの鈴らしくないな。

鈴　変じゃないよ。わたし、何があっても、ママについて行くって決心しているから。

ユリ子、拳銃と鈴をながめながら、しばらく考え込む。

ユリ子　鈴、もしかしたら、やけになっていない？

鈴　やけになんかなってないよ。

ユリ子　だって、いつも慎重な鈴の言葉とは思えないな。私たちはたくさんのお金を奪うんじゃないのよ。私たちが暮らしていける分だけでいいのよ。仲間集めてギャング集団つくってどうするのよ。それじゃあ、悪の組織じゃない。二人で挑戦するところに意味があるのよ。

鈴　奪うお金が多くても少なくても、人数が多くても少なくても、ギャングはギャングじゃない。ママもわたしも悪い人になってしまうのよ。

ユリ子　悪い人って、そんな簡単に人間を仕分けしちゃあダメよ。

鈴　じゃあ、わたしたちは正しい人間だって言えるの？　友香ちゃんに、わたし、ギャングになったんだよって、そんなこと言えないよ。恥ずかしいよ。

ユリ子　やっぱり、鈴はギャングに反対なんだ。ギャングになりたくないんだ。

鈴　ギャングになりたい人なんているはずないよ。

ユリ子　なりたくてなるんじゃないのよ。もう、これしか、生きて行く道がないの。鈴とママは二人で一人みたいなものなんだから、協力してほしかったけど、鈴がどうしても嫌だって言うなら、ママ一人でやる。

鈴　わたしはいつだってママと一緒だから。ママがどうしてもって言うならそうするよ。もう、命を賭ける覚悟は出来てるから。

ユリ子　命を賭ける覚悟だなんてオーバーだな。生きるためにやるんだから。

鈴　だって、武器を持ってギャングになるんでしょう。失敗したら、と言うより失敗するに決まっている。

ユリ子　バカねー、失敗しないためにいろいろ作戦を練っているんじゃない。大丈夫、きっと大成功するか

ら。

鈴　ママ、わたしはきっと大失敗すると思う。ママは彫刻家としてはすごいと思うけど、こんなことが出来るとは思えない。失敗するのが分かっていても、それでも、わたしはママについて行く。ママと離れることは出来ないから。

ユリ子　鈴は最初からこの計画が失敗すると思っていたんだ。嫌々ママについてきてくれるんだよね。

鈴　嫌々に決まってるじゃない。悪いことだもん。きっと二人とも警察に捕まるし、もしかしたら、警察に撃たれるかもしれない。でも、わたし、ママと一緒に警察に撃ち殺されてもしかたないと思っているよ。わたし、十二年間も生きてきたから充分だよ。十二年って、けっこう長かったから。ママの子どもで、とってもラッキーだったから。お友達のお家に行くと、お父さんが居て、お母さんは奇麗にお化粧なんかもしていて、お家もきれいに片付いていて、可愛い手作りの上履き入れなんかも持っていて、手作りのハンバーグやトンカツやドーナツなんかも作ってもらっていて、でも、うらやましくなんかなかったよ。本当だよ。わたしのママは、ハンバーグは作れないけど、木の塊をコツコツ彫ってたなあーと思ったら、魔法みたいに、木の中からチョウチョの舌のような渦巻きの形が出てきて、横から見るとフライパンみたいだった。どうしてママは、あの木の塊の中にこんなおもしろいものが隠れていたのを見つけたんだろうって、いつも不思議だった。あんな素敵なもの作れるママなんてどこにもいないよ。ほんとうに、わたしはママの子どもでラッキーだったよ。ママもわたしも死んでしまったら、ここでのママとの暮らしはぷっつり切れて終わってしまうけど、そして、もう、友香ちゃんにも、クラスのみんなや桜田先生にも、ヨシさんにも、おばあちゃんにも、誰にも会えないし、話すことも、見ることも、ごはんを食べることも、何にもできなくなるけど、悲しくない。ママといた十二年間は、ものすごく楽しかったから。

鈴、声をあげて泣き崩れる。

ユリ子　鈴、泣かないで。鈴がそんなに泣いたの初めてだね。泣かない強い子なのに。ごめん、ママが強引だった。鈴の人生が十二年で終わりなんて、何も出来なくなるかもしれないなんて、そんな悲しいこと考えてもみなかったよ。鈴をこんなに苦しめていたなんて、ママ、なんてバカだったんだ。

鈴　わたし、もう長く生きてきたような気がする。もう充分生きてきたような気がする。だから、大丈夫。ママと一緒で楽しい人生だった。

ユリ子　鈴、そんなこと言わないで。ママが悪かった。お金なんていらない。鈴さえいてくれればそれだけで充分だった。ギャングになって鈴を悲しませるなんて、そんなことしない！

鈴　本当？　ママ、本当にギャングにならないでいてくれるの？

ユリ子　うん、やめた。ギャングは、しばらく決行中止。

鈴　しばらく中止って、また、いつかやろうとするの？

ユリ子　大丈夫。しばらく中止じゃなくて、永遠に中止。あまりの貧乏に、ママ、まともな判断が出来なくなっていたのかもしれない。一番大切なものなくすとこだった。何か他に知恵を働かせてみるから。

鈴　ほんとう？　諦めてくれるの？　ギャングにならなくていいのよね？　ママもわたしも死なないよね。

ユリ子　死なない、ママも鈴もまだまだ死なない。死なせない。十二年で充分なんて、そんなこと言わせたママが大バカだった。鈴はもっともっと長く生きるのよ。十二年の五倍も十倍も。鈴には、これから素敵なことがいっぱい待っているから。

鈴　ママにも素敵なことが待ってるよ。いつか、ママの作品が認められて、どこかのホールやホテルのロビーにママの彫刻がでーんと置かれて、それをみんなが『すごいなー』と、眺めているの。あん

まり素敵な作品だから、みんな立ち止まって動けないんだ。銀座の大きな画廊で個展を開いたら、いっぱい人が来て、作品には売却済の赤いピンがあちこちにささっているの。そんな日がきっと来ると思う。

ユリ子　鈴……。ありがとう。ママの作品、今のうちに買っておいた方が得だよって、友人知人に売り歩くっという手もありだね。とにかく、就職活動も諦めないで頑張ってみるよ。ギャングじゃない方法をきっと見つけるよ。

ユリ子　（ユリ子、拳銃を愛しそうにながめながら）それにしてもいい出来だね。これを見本にして偽拳銃の注文製造なんてことで商売にならないかな……。

鈴　（ユリ子の言葉を遮るように）ママ、拳銃のことはもう忘れて。

ユリ子　分かってるよ。

鈴、ユリ子から拳銃を奪い取って、舞台端の箱の中に仕舞い込む。

（暗転）

7

ユリ子、テーブルに座って求人の雑誌のようなものをめくりながら、電話をかけている。

ユリ子　もしもし、求人の募集を見て電話しています。明日からでも働けます。お宅のビアホールでぜひ働きたいです。私、腕に力がありますから大ジョッキ片手に四個ずつくらい平気で運べます。えっ？　はい？　もう決まったんですか。とても残念です。（受話器を置いてひとり言で）こんなにいっぱい仕事の募集があるというのに、なぜ決まらないのだ。さて、次は？と

遠くからパトカーのサイレンが聞こえて、だんだん大きくなってくる。ユリ子、一度、様子を見に外に出て戻ってからラジオのスイッチを入れる。（実際にラジオはなくてよい。箱の一つをラジオに見立てる）

ラジオの声　松林商店街のコンビニに強盗が入ったようです。今現在、犯人は人質をとって立て籠っているもようです。警察が出動、犯人を説得をしています。隙をみて逃げ出した客の証言から詳しい状況が少しずつ分かってきました。人質はアルバイトの女性店員と女性客の二人のもよう。また、犯人は一人で、小柄な若い男または女、マスクにサングラス、帽子を深く被り、マントのようなもので体を覆っていて性別もよく分からない。ただ、拳銃のようなものを突き付けて、黙って紙に書いた要求をレジの店員に示したということです。詳しい要求内容はわかっていません。では、ここで、八王子市のノンさんからのリクエストをお送りします。青春時代のちょっと苦い思い出とのこと。「ビバ・アメリカ」です。

「ビバ・アメリカ」が流れる。

ユリ子　（独り言で）コンビニ強盗なんてこの松林商店街もアメリカ並みだね。まったくバカなこと考えるヤツがいたもんだわ。（少しの間）いやいや、それだけそれだけ切羽詰まった状況、分かるわ～。

鼻歌なんか歌いながら気楽に、ユリ子、箱の中を確認する。

ユリ子　ない！　ない！　私の拳銃が消えてる！

ユリ子、あわててあちこち探しまわる。

ユリ子　どうして？　あの拳銃はどこへ行ったの？　ちゃんとここに入れて、何度も確認したはずなのに。ええーっ、松林商店街のコンビニ強盗って、まさか……。いやいや、あの子に限ってそんなバカな事はしない。あんなに悪の道を嫌ってたんだ。わたしと違って真面目な人間だ。

ユリ子、床にへたり込む。

ユリ子　現場に行って確かめるべきか、いやいや、我が子を信じなくてどうする。でもやっぱり確かめなくちゃ。もしも、もしも鈴が一人で決行していたら……。救い出さなくてはいけない。やっぱり、機関銃なんかも作っておけばよかった。

ユリ子、パニック状態でノミやトンカチを持って動き回ってひとり言。

ユリ子　待て待て、武器を持って合流するにしても、何か作戦を考えなくちゃ。どうしょう。そうだ、私は立て籠り犯の母親です。私が中に入って説得します。その線だ。そして、やっぱりギャングを二人で実行するしかない。鈴、待ってろ、今、助っ人に行くから！

ユリ子、ノミやノコギリを握って確認している。そこにドアの開く音がして鈴の声が聞こえる。

鈴　ママ、ただいまー。今、駅前のコンビニで事件だよ。すごい人だったよ。なんかね、強盗だったみたい。

ユリ子　ああー、鈴……。（鈴に突進して）無事だったんだ。心配したよ。ラジオのニュース聞いて、もう、ママびっくりして……。

鈴　ママ、何慌ててるのよ。わたしが人質になってるかもなんて心配したの？

ユリ子　ひ、ひ、人質っていうか、何というか。

鈴　やだー、この通り大丈夫だよ。

ユリ子　鈴、ママの作った拳銃が見当たらないのよ。

鈴　ああー、あれはわたしが預かってます。

ユリ子　ええーっ、何で？

鈴　だって、あれがあると、ママがまた変な気を起こしたら大変だから。

ユリ子　（座り込んで）ああー、そうね。

鈴　なーに、ママ、わたしがあの拳銃でコンビニ強盗なんかやってるかもって思ったの？

ユリ子　思ってない、全然思ってない！　そんなことこれっぽっちも考えなかった。

鈴　そうお？

ラジオの声　八王子のノンさん、苦い思い出に浸っていただけましたか？　ここで、ニュースです。ただいま、松林商店街コンビニ強盗事件の新しい情報が入ってきました。犯人は警察の説得に素直に応じて投降したもようです。なんと、犯人は小学生で面白半分で強盗犯になってみたかったと言っているようです。武器の拳銃は水鉄砲だったとのこと。

ユリ子と鈴、顔を見合わせる。

ユリ子　水鉄砲……か。

その時、電話が鳴る。（実際に受話器はなくて音だけでよい）ラジオのスイッチを切る。

ユリ子　はい、もしもし華岡です。先生、ご無沙汰しています。ええー、そうなんです。はい、はい……。ええーっ！　ほんとうですか？　うれしいです。感激です。助かります。もちろん大丈夫です。（メモをとりながら）はい、はい、はい。承知しました。先生、ありがとうございます！

ユリ子、興奮気味に受話器を置くと、走り寄って鈴を抱きしめる。

鈴　ママ、何？　どうしたの？

ユリ子　鈴、ああー、鈴。よかった！　ギャングにならなくてすみそうだよ。

鈴　えっ？　ギャングはやめたんだよね。何があってもなくてもギャングは永遠に中止だよね。

ユリ子　もちろんよ、鈴。ああーっ、ラッキーなことってあるもんだね。

鈴　何があったのよ、ママ。早く教えて。

ユリ子　うーん、実はね、大学の時の教授に何か仕事があったらお願いしますって、頼んでおいたの。だいぶ前なんだけどね。今、その電話だったの。仕事を紹介してくれたのよ。

鈴　ほんとうに！　ラッキーなことって、隠れてたみたいに突然出てくるんだね。

ユリ子　そうだよ、もったいぶっちゃてさ、とっとと出て来いだよね。その仕事、どんな仕事だと思う？

鈴　ママにピッタリのお仕事？

ユリ子　そうなんだよ。女子刑務所で木彫教えるんだって。ちょっと遠いけど日帰りできるし交通費も支給されるんだって。週二日だけど助かるよね。

鈴　ママ、女子刑務所ってあの犯罪を犯した人たちのいる？

ユリ子　鈴、そんな顔しないで。刑務所の中の人っていうだけで差別しちゃあいけないよ。ちゃんと罪を償っている人たちの集まりだからね。

鈴　そうじゃなくて……。

ユリ子　受刑者の人の中には、ぜひとも仏像を彫ってみたいという人がけっこういるんだってさ。やっぱり、ほら、自分の罪を悔いていて、仏像彫って懺悔したいんだろうね。そらゃあ、そうだよねー。罪を犯したら、どうしてあの時あんなバカなことしてしまったんだろうって、後悔するに決まってるよね。

鈴　ママ……。

ユリ子　鈴ったら何よ、変な顔して。

鈴　ママが刑務所の中で後悔しなくてよかったよ。

ユリ子　ええー？

その時、玄関のチャイムが鳴る。

ユリ子　（玄関に向かいながら）誰かな。どなたー。

玄関のドアの開く音がして、ユリ子と桂木の会話が聞こえる。

ユリ子　何？　どうしたの？　何か御用ですか。

桂木　そうなんだよ。

ユリ子　いやいや、勝手に上がり込まないで。

桂木、食材などの荷物を抱えて、ほとんど強引に上がり込んだ様子で登場。

桂木　ただいまー。さあー、今夜は待望のハンバーグだぞ。

ユリ子　た、た、ただいまって何……。

鈴、一瞬驚くが決心したように。

鈴　パパ、お帰りなさい。

桂木　パパ……。パ、パパ？（うれしそうに悲鳴のように何度も）

ユリ子　（鈴を凝視して）パパ？（桂木を指差して）ペ、ペ、ペンギン？　ここ、南極？

（幕）